

PROGRAM

ヴェイヴス

バー・ノルガルド

野づちの歌

高橋悠治

グラウンド I

福士則夫

サッファ

ヤニス・クセナキス

インタビュアー 内山 修一

四季のコンサート 冬

1984年12月4日(火) PM 6:30

浜松市民会館

主催 浜松音楽友の会

作曲家、ピアノ奏者。桐朋学園高等学校音楽科から同大学作曲科に進んだが58年中退。60年東京現代音楽祭は初めてピアノリストとして登場、ポー・ニルソンの難曲を弾いて一躍注目を浴びた。作曲家としてはNHK委嘱の「電子音楽と12楽器によるソノリエーズ」(1962)、「電子音楽(世界のへそ)」(1963)など発表。この頃からクセナキスに傾倒し、63年ベルリンに渡って師事する一方、同地でピアノリストとしても活躍した。66年ロンドン・エラー財団の給費でニューヨークに移り、コレビュータによる作曲などを研究、インディアナ大学で教授活動も行なった。近年、演奏集団「水牛楽団」を組織し、異色の活動を行っている。

高橋悠治 (たかはし ゆうじ)

昭和43年 東京芸術大学打楽器科入学。
高橋美智子、有賀誠門下氏に師事。同時にマリッパを安倍圭子氏に師事。昭和47年 東京芸術大学大学院入学。
シュネーア国際音楽コンクール打楽器部門で第1位。最優秀賞(アリ・アメリカン賞)を受ける。
昭和52年 シュネーア国際音楽コンクール打楽器部門にて1位なしの2位に入賞。
その後、毎年3〜4ヶ月、ヨーロッパ各地の現代音楽フェスティバルに招かれ活躍する。また、日本国内においてもアンサンブル・ヴァン・ドリアンと結成する等現代音楽の紹介に力を注いでいる。
カメラータ・レコード「吉原すみれ打楽器の世界」昭和54年度芸術祭優秀賞受賞

吉原すみれ (よしわら すみれ)

ピアノ・ソロ



吉原すみれパーカッションリサイタル

共演 高橋 悠治

デンマークの作曲家ノルガルトのこの作品は1969年、同じデンマークの打楽器奏者で指揮官のリロフの委嘱によって作曲され、この人に献呈されている。1人の打楽器奏者（使用する楽器は4コング、大タム・タム、クロマティック、ゴング、マリimba、シンバル、トム・トム、2ティンパニ）のための「ウェーブス（波）」は連続する打楽器のアタック音が、前後や同時的なリズム的關係の中でさまざまなパターンとそのデリケートな変化を聴きてもたたらすことをねらったものである。また、この作品の出版楽譜（ウィルヘルム・ハンセン社）には、この作品を演奏するための基礎的な練習課題が多数加えられており、リズムによるデリケートな表現のための教育的作品という意図も持っているようだ。

波のリズムは4つのゴングにはじまり、4つのクロマティック・ゴング、4つのマリimbaの鍵盤を経過して、シンバルとドラムの混った響きで終るリズムで、曲は2つのティンパニの上に落されたゴム・ボールの自然の法則に従った自由な振動によって終る。

グラウンド I

福士 則夫

雲母（きらら）か、或は桂石（けいせき）の粒子を想わせる音質感。しなやかな胡蝶の運動にも似た吉原すみれの世界は目眩むほどに色彩的である。滞仏中に作品依頼があった当時—おそらく74年頃のことと思うが—暗闇に息をこらして毎日をやり過ごしていたパリ生活に突如渦を巻き通りすぎていった花嵐は、私にとって魅力的な素材のひとつとなった。

帰国後の75年秋、話が具体化してきたこともあっていく度か彼女のスタジオに足を運んだおりもち出されてくる楽器とも思えぬ（道具）など—それは本来、楽器ではなく他の目的のために実際使われているものたち—が次つぎと並べられ試された。バネ・鉄管・オモチャ・装身具・貝殻・ガラス・ベアリングの玉、朝鮮の仏具屋にあったという木製の鈴などなど……。その鮮やかな記憶のいくつかは切り抜かれ保管された。一方、すでに市民権を獲得している打楽器たちはほとんどの場合、解体され再吟味された。そうした手づきを経て得られた音響空間は私の内耳殻をたえずおしひろげ膨みつつけていった。

音が形を求め形が音を識別していくことは自明のことではあるがそうした作業がふと消えて、しなうマレットの向う側に存在する精霊たちの木霊（こだま）が私の内的なグラウンドに還ってきたというてごたえを覚えたとき、すべての手順の大半は完了していた。30kgの荷物とともにヨーロッパを今も巡り歩いているというグラウンド I は、もはや私ではなく、吉原すみれの言語に近いであろう。（福士則夫）

曲はある定数と、増殖或は蚕食される不定数を骨子とし、木質・金属・皮・金属・木質の五部分からなる。

〈使用楽器〉 5 アンティックシンバル、1 オモチャの鉄琴、5 カウベル、3 リン、1 プラスチャイム、1 グラスチャイム、3 吊りシンバル、1 チューブラベル（F管のみ）、1 ゴング、1 タムタム、4 ウッドブロック、3 テンブルブロック、1 木鈴、1 ギロ、1 鳴子、1 マリimba、1 マラカス、1 オモチャ、1 ハーモニカ、1 牛舌、1 タンブリン、2 ボンゴ、5 トム

野づちの歌

高橋 悠治

1983年に開かれた。

ふだん着のコンサート“高橋悠治と仲間たち、の時に高橋悠治自身と吉原すみれのために書かれた作品” 即興性が重視され、バラフォン、アंकロングなど、民族楽器が多用される。本年11月“カラワーン楽団歓迎コンサート”で再演された。

サ ッ フ ァ

ヤニス・クセナキス

クセナキスは、1922年ギリシャ人の両親のもと、ルーマニアで生まれた。

ギリシャ・パリで、メシアンなどに師事し、また建築家としても、ル・コルビュジエと共に活躍してきた。クセナキスは、コンピューターを導入するなど、科学的な面と芸術との相関係数を問題にするなど、世界の作曲家でも、最も重要な意味をもつ作曲家の一人として現在も活躍中である。

この作品は、イギリス・パッハ祭の委嘱作品として作曲され、1976年に初演された。

この作品は、同じギリシャ人の女流詩人に捧げたもので、楽譜からみると、即興的な要素は全くなく、リズム主体のものであり、あらゆる面からみてもリズムミクな作品である。